

# 南方（ニューギニア）

ニューギニア戦線に残した

若き日の足跡

岐阜県 丹羽 千代一

終戦より五十余年が過ぎた平和な日本の現在、悲惨な戦争体験は年と共に私の脳裏に風化して、脳底には春の霞のように模糊とした薄い記憶しかない。ある日、戦争体験の投稿の依頼があり、即座に返答できなかったが再三の従兄弟の依頼に心動かされて、薄らいだ記憶を辿りながら纏めてみる事にしました。

私が岐阜憲兵分隊に勤務していた昭和十八（一九四

三）年一月八日、突然第五、第六野戦憲兵隊の編成が下令され、私が第六野戦憲兵隊要員として東京世田谷の野戦憲兵隊に集合を命ぜられたのは、昭和十八年一月十五日の事である。直ちに両隊に編成されて、第五野戦憲兵隊は十日も経たないうちに任地に向けて出征して行ったが、第六野戦憲兵隊の私達は長日の滞留となり、漸く二月十一日宇品港で乗船、四隻の船団を組んで一路南を目指して豊後水道を南下しました。船団の前方には護衛の駆潜艇の爆雷投下で、敵潜水艦を排除しての南航でした。

大海に出て二日目の真夜中、船上の監視哨の「敵潜水艦影発見！」の報告に、船は警笛を鳴らして警戒を呼びかけ、一同は救命胴衣を着けて待機する。海上は爆雷投下の爆発音と緊張した場面もあったが事無きを

得て南下、途中パラオ港に停泊した。ここで隊の任地  
が決定されウエワク、マダンの両隊は下船、ラバウ  
ル、ラエ、ボーゲンビルの組はさらにラバウル基地を  
目指して南下した。

幾日目だったか海の穏やかな昼前、水平線上に薄黒  
い鳥影が見えて来た。船員が「あれがラバウルのある  
島だ。今日は上陸できる」と言ってくれた。長い船上  
生活で疲れていたので安堵した矢先、上空に四発の重  
爆の機影を発見した。戦場慣れしていない我々は友軍  
の制空権下の基地ラバウルの目前でもあるので油断も  
あった。

パラオで見た友軍の四発の水上偵察機が来たものと  
勘違いし皆で歓声をあげて見上げていた瞬間、甲板に  
叩き付けられるような大爆風音に見舞われて仰天、敵  
機も慌てていたが我々も慌てた。幸い爆弾は船団の中  
央で爆発したので無難ですんだ。

笑い話のような体験もしたが、船は夕方近くラバウ  
ル港の岸壁に接岸し、無事戦地に上陸し宿舎に落ち着  
いたが、その晩敵機の爆撃に見舞われ対空砲火の猛烈

な射撃光景を目にして緊張した。

しかし我々の任地はニューギニア、ラエで、赴任す  
る便船が無い。私達が通過して行かなければならない  
ダンピール海峡一帯は既に敵の制空権下にあつて、一  
カ月程前この海峡で第五十一師団の主力が、任地ラエ  
に向けて航行中敵機の襲撃に遭い、壊滅的打撃を受け  
た悲運の海峡である。以来敵機の哨海の敵しい海と  
なつて、輸送艦船の航行は昼夜共に不可能な状態と  
なつていた。仕方なくラバウル北方の海軍基地カビエ  
ンよりフィンシユハーヘンに向けての物資輸送の駆逐  
艦に便乗させてもらうためにカビエンに赴く。

艦は昨夜の任務を終えて停泊していた。甲板には、  
昨夜の輸送の帰路に収容した見る影もない痩せ細つて  
息も絶え絶えの病兵が所狭しと並べられ、重患者が異  
様な声を上げて呻吟している。初めて目にする戦場の  
惨状に、これから赴かんとする任地戦線の悲惨な光景  
が想像されて一層身の引き締まる思いでいっぱいにな  
る。

目指すフィンシユハーヘンへ輸送してもらおうように艦上の人となる。夕方近く出港、一路目的地に向かつて航行を始める。

ちょうど魔の海峡の通過は夜半、案に違わず海峡に差し掛かると、既に上空には敵重爆撃機四、五機が飛翔して照明弾を投下し始めた。艦は戦闘態勢で全速力進航するが脱出する事ができず、遂に作戦を変更して基地に帰港する。また次の晩に再度試みたが昨夜同然敵機の警戒が厳しく目的を達せず、遂に作戦を変更して基地に帰港する。また次の晩に再度試みたが、昨夜同然敵機の警戒が厳しく目的を達せず、作戦は当分遂行不可能となり、止むなくラパウルに引き返し、今度は直接ラエの港に行く物資輸送の潜水艦に便乗してラエの港に浮上した。

揚陸作業時間は、十五分で完了し港を出港しないと敵機の爆撃に遭う。兵士は必死で作業をする。我々も兵器だけを持って、私物は海軍に任せて大発艇内に飛び降りる。時は昭和十八年四月二十九日の夜のこと、漸く念願の任地ラエに到達することができた。

先発隊の設営した隊舎に落ち着く。いよいよ明日からは、野戦憲兵特有の任務遂行すべき勤務が待っている。

我々の勤務場所は、彼我歩哨線の間接地帯である。敵の情報収集のために友軍の歩哨線を遠く後にしての潜入勤務で、現住民土民と共に懸命の偵察をする。

こうしたラエでの勤務に服すること約五カ月、ちょうどその頃敵の進行北上は速度を増して、サラモア東方で頑張る第五十一師団も敵制空権下で我が方の物資の補給が伴わず、敵は近代輸送手段を駆使して短時に大量輸送を敢行して物凄い銃砲火で攻撃を仕掛けてくる。敢闘精神旺盛な我が軍兵士も、ひたすら陣地による防御で頑張るが、逐次後退を余儀なくされて、遂に九月頃になると後方のラエの四囲は敵の包囲する所となる。

ここで軍は第五十一師団に転進を命じた。敵の包囲を突破する手段は唯一標高三千数百有余メートルのサラケット山の峻険を踏破するより方途がない。第五十一師団は難渋覚悟で踏破作戦を敢行したが、山中食

なく難路に疲労困憊の末、二千五百有余人の犠牲の上に約一カ月を費やして踏破に成功しキヤリに到達した。しかし早くも敵はフィンシハーヘンに上陸して息つく間もない。

この敵を第二十師団の精銳が奪回するよう攻撃を仕掛けたが、敵は物凄い物量の砲弾火で応酬し退却せず、敵は逆に我が軍の後方に上陸、包囲攻撃を仕掛けて、遂にフィニステル山系に後退転進をせざるを得なくなる。敵の進攻速度は俊敏で、主力の進攻の前面に我が軍の作戦は後手に陥り見るべき戦果なく、遂にはウエワク、アイタベ、ホーランジャに各師団の集結を計りフィンシハーヘンより徒歩での大移動が始まった。

しかし昭和十九年四月二十二日の払暁、目指すアイタベ、ホーランジャに敵の大軍が上陸し速攻してきたため、軍は敵の包囲の中に陥ったが、最後の力を駆使してアイタベ作戦の敢行となる。

時を同じくして軍は猛虎挺身隊。大高搜索隊を編成してアイタベ南方山中に潜入させてアイタベの警備隊

の收容と動向を搜索するため派遣する。この搜索隊に配属憲兵として任務遂行の一端を担って隊と行動を共にし偵察をしたが、友軍の動向は判明せず、大高隊長は意を決して私を長とする五人の斥候をもってアレキサンダー山系を越えて山東方のカボアム部落に潜行して友軍の動向偵察を五日間の日程で完了し帰隊するよう命じた。その間の五人の食料は米五合（全部使うな、後は現地物で賄え）、兵器は十一年式軽機一と各自の小銃で出発、目的地に向かって山越えにかかる行動を起こして二日目の夕方、小高い稜線上の部落を発見、宿営をするため部落に入る。

そこは眺望のきく小さなニッパハウスの教会のある部落で、私の視野には敵の上陸したアイタベの港は一望でき、港を黒く塗り潰す程の敵艦船が停泊して、閃光通信を発信して陸上と交信しており、上空には戦闘機と思われる敵機が群れをなして飛翔している。いよいよ明日から敵地か、緊張もひとしおだ。

明朝、小山を下山すると、土人道と川の接撃部に真

新しい包帯で敵偵察境界線の目印がしてある。敵斥候の跳梁区域だ、目と耳に全神経を集中して河床道のある川側を潜行する。途中、古い農園跡で食料を見付けて腹を満たす。尚も河床を下ると敵兵の靴跡を発見、いまだ靴跡に溜った水が濁っていた。一層警戒を厳しくして川側を下ると道は川から離れて林内に入る。

図上で見るともう日的地は近い。進むこと約三十分程で密林がぼっかり口を開けて部落が見えてきた。目的地カボアムだ。その頃になると快晴だった空がいつの間にか雲が低く垂れ込めてスコールの来そうな仄暗い夕方近くの様子になってきた。

部落に潜入すると中央の広場に頭蓋骨が棒に刺して立ててある。これは土民が戦いの時に行う習性とか、明らかに反抗の証だ。四囲に警戒し点在する土民小屋を搜索すると、確かに友軍が部落に入って投棄したと見られる軽機の弾薬、その他箱類が散乱している。尚も部落の奥深く潜入するとニッパハウスの中に友軍の死体が軍服の中に骨だけという状態で二列になって倒れている。しかし友軍の移動先など見当もつかない。

日も暮れかけたその頃、怪しかった空は破れて土砂降りのスコールだ。辺りは暗くなってきた。偵察もここまでと反転し、帰路の河床道の接離部まで来ると、昼歩いた川は濁流渦巻く激流と変貌して我々を寄せ付けない。致し方なく川側のジャングルを腰まで濁水に浸りながら前に昼食した場所の古農園の廃屋へ夜半まで掛かって引き返す。ここなら敵の目も届くまい。衣服を乾かす頃には、空には大きな月が出て何もなかったような顔をしている。

明朝は、早く隊長や隊員の待つ駐留部落へ帰路の歩を早める。帰隊までに二日掛かる。この任務終了後、大高搜索隊は第四十一師団の配属となり、その後第二十師団の三宅支隊長の指揮下に入り、山南地区のオニヤローブにおいて休養とのこと。約半月程度で支隊前面マルンバ高地（敵の中央進攻路前面）の陣地構築準備を命ぜられる。

敵前中央の第一線前面稜線上には敵影が望みできる。陣地構築を始めて五日目頃より敵迫撃砲弾が飛来

し始めた。中には発煙弾も混じって飛来した。敵の歩兵が攻撃肉薄して来る。一日に前後二回来る時もある。陣地といっても深さ一メートル直径八十センチ位の穴に棒を渡して七分見当に土を掛けて、各自七、八メートルの間隔で横一列の掩蓋壕である。いよいよ最後の時が来たか、この壕が墓穴か、と各人決意も堅く、来攻する敵を迎撃するに懸命である。

この頃になると糧秣は全くなく、塩は各人携行して舐める程度、弾丸は補充なく、糧食は飯盒半分のタロ芋の塩分無しのを煮たものを持って壕に入って守備する悲惨な状態での迎撃を繰り返した。初めは陣地への敵迫撃砲の砲撃は二、三十発程度で難はなく、十日程この攻防が続いたが堅陣で微動もなかった。

業を煮やした敵は、昼過ぎより猛烈な砲撃を始めた。撃つは撃つは延々一時間半、砲五門の連続発射だ。顔も頭も出せたものではなかった。壕の壁にもたれて身を潜めて待ったが、弾は二十二秒位で到達して炸裂する。爆音と硝煙、土煙で意識は朦朧となる。今日は俺も直撃を食らって終わりかと覚悟を決めて弾着

の伸びるのを待つ事一時間半位、砲弾は我々の頭上を越えて炸裂し出した。

よしと思ひ壕から顔を出して吃驚、陣地の遮蔽物は一草もなく禿山同然に吹き飛ばされてしまっている。敵影を求めて四囲に警戒の日を注ぐ。陣地の様子が変わったと思う瞬間、右台上の側面攻撃の猛火に晒され、一たまりもなく陣地は敵に制圧されてしまった。

残兵僅か十数人、編成以来各地に転戦して勇名を馳せて活躍してきた猛虎挺身隊も遂に力尽き、残兵は原隊に復帰し、多くの思いを残して消滅してしまつた。時、正に昭和二十年五月二十七日午後三時頃でした。

この陣地確保のためには多くの戦友の血を流し犠牲を強いられた十数日でした。私もこの砲撃の最中に原隊長（大高隊長受傷交替）の当番兵を呼ぶ声を耳にした。当番兵は私の右側の陣地の軽機の射手だ。返事はすれど敵砲撃の真つ最中動きがとれない。私は意を決して指揮官の下に行くため壕を飛び出した。瞬間に砲の破片が私の左大腿部前部に突き刺さって受傷し、遂

に指揮官の下に行つてやる事はできなくなつた。

また私の隣の当番兵も、攻撃してくる敵を射撃中、前面林縁の敵軽機の狙撃を受けて事切れてしまった。

私もその後、大高隊長と共に杖を頼んで足を引いての本部復帰となる。

悲惨な戦争は二度としてはいけない、人類最大の悲劇なのだから、勝つても負けても多少差はあるけれど悲劇は伴う。戦い程惨めなものはない。人類最低の所業だ。

私の従軍したニューギニア戦線は全軍十二万有余の戦友をバブアニューギニアの土に残して、残兵数%に満たない中、生かされて帰還する事を得た私です。

今はひたすら亡き戦友のご冥福を祈るのみです。